

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：14602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25770224

研究課題名(和文)古代アジアの対外交渉に仏教が果たした役割について

研究課題名(英文)The diplomatic role of Buddhism in ancient Asia

## 研究代表者

河上 麻由子(KAWAKAMI, Mayuko)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：50647873

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：5～9世紀に仏教を受容したアジアの王権は、勅命による經典目録の編纂や寺院建立といった崇仏事業、あるいは君主を菩薩・転輪聖王と位置づけることで、仏教の持つ影響力を王権に内包していった。仏教に裏付けられた王権の正統性は対外的にも喧伝され、諸国の対外政策・認識には仏教の影響が認められるようになる。その結果、当該時代のアジアでは、仏教を思想的基盤とする諸国間交渉が、様々なレベルで展開したといえる。

研究成果の概要(英文)：From the 5th to the 9th century, Asian kingship that accepted Buddhism tried to absorb the influence of Buddhism through such Buddhist policies as editing catalogues of Buddhist texts by imperial order, building Buddhist monasteries and identifying kings as Bodhisattva or Chakravartin. Legitimacy of those kingship, which was supported by the religion, was proclaimed over other kingdoms, to the extent that Buddhism influenced the foreign policies and international understandings in those kingdoms. As a result, in Asia of this era, negotiations via Buddhism as one of the ideological foundations was developed at various levels.

研究分野：史学一般

キーワード：仏教 外交 僧侶 「職貢図」 寺院 仁寿舍利塔 菩薩戒 転輪聖王

## 1. 研究開始当初の背景

古代アジアの対外交渉に仏教が与えた影響については、これまで殆ど重視されてこなかったといつてよい。仏教が諸国の政治に与えた影響を、特定の地域・時代を限って指摘する研究はあっても、仏教の影響が諸国間交渉にまで及んでいたとする研究は極めて僅かであった。このような研究状況に対し、私は、主として日本史の立場から、仏教色を強調する古代アジアの対外交渉 外交文書で君主を仏教的に称賛し、あるいは仏教的文物を朝貢品にするなど について、唐代を下限として、文献史料の調査を進めてきた(河上麻由子『古代アジア世界の対外交渉と仏教』山川出版社、2011年)。その過程で浮上した問題も多い。本研究は、以下の目的・方法により、過去の研究に付随して生じた問題に取り組むものである。

## 2. 研究の目的

(1) 仏教色を強調した対中国交渉は、南北朝時代から唐代にかけて複数の皇帝に対して行われた。このことは、少なくとも仏教色を強調する使者を派遣した諸国の側が、それらの皇帝は対外関係に仏教色を取り込むのに積極的であると判断していたことを意味する。中国の対外政策とその根底にある対外認識を問うべきであろう。

(2) 私はかつて、南北朝～隋唐代に菩薩信仰が興隆する中、人心掌握のために菩薩戒を受けて菩薩となった皇帝を通史的に取り上げたことがある(前掲図書)。しかし、皇帝やその他諸国の君主が、自らの求心力を高めるために行った仏教政策は、受菩薩戒には限られない。その他の崇仏政策に考察を加えることで、君主権力と仏教の関係を総合的にみていく必要がある。

(3) 仏教に基づく国際関係の多元性である。旧稿では、6世紀、中国 諸国間に仏教に基づく国際関係が構築された可能性を指摘した。しかし、仏教を国際関係に取り込んだ国は中国には限られない。アジア諸国間交渉に仏教が影響を与えた事例を搜索し、相互の影響関係・同時代性を理解するべきである。

(4) 日唐交渉における仏教の役割を、開始期にさかのぼって考察する。留学僧を派遣し、あるいは経典や戒師を将来した日本の遣唐使は、その他アジア諸国の遣使と同様に、宗教的目的のみならず、皇帝の歓心をかうといった政治的な目的を持っていたと推定してよい(河上麻由子「聖武・孝謙・称徳朝における仏教の政治的意義 鑑真の招請と天皇への授戒からみた」『九州史学』155、2010年5月)。日本が中国仏教導入に務めたことに込められた政治的意義を、開始期に遡って考察するべきである。

## 3. 研究の方法

(1) 諸国に仏教色を強調した朝貢を促した中国側の政策など、仏教色を強調する遣使を受けた皇帝の治世における対外政策・認識を分析する。

(2) 皇帝主導の仏教政策の中でも、南北朝時代に始まる勅撰経典目録の編纂などに焦点を当て、皇帝権力が仏教の持つ求心力をどのように取り込んでいったのかを分析する。

(3) 対外的に菩薩となった国王の存在は、仏教を思想的基盤の一つとする国際関係が、古代アジアに複数、恐らくは重なり合って存在したことを示唆している。国王が仏教的に荘厳された事例を収集し、仏教に基づく国際関係の多元性を追究する手掛かりを得る。

(4) 日本が留学僧を中国に派遣することは、隋代から始まる。従来、留学僧の派遣については、日本国内の宗教的・政治的な要請に基づいて行われたとのみ述べられてきた。しかし、留学僧の派遣は、中国側が受け入れを歓迎したからこそ可能であった。留学僧を派遣し続けた日本側の意図を、同様に留学僧派遣の経験があるその他東アジア諸国と比較しつつ分析する。

## 4. 研究成果

(1) 仏教色を強調した対中国交渉が最も多く行われた梁代について、諸国から至った使者の姿を描くなど、梁の対外認識を視覚的に表現した「職貢図」に着目した。

まずは、梁代における仏教色を強調した遣使の中でも、特に大通二年(528)における波斯国(ササン朝ペルシャ)の遣使について、520年代後半から530年代前半における波斯の対梁交渉が、仏教と密接に関連していたのみならず、それが安氏を名乗る人物によって主導されていたことを明らかにした(図書)。 「職貢図」の波斯国条が、ササン朝の王は釈迦の時代に仏教を保護したコーサラ国の王 Prasenajit の末裔であるという説を冒頭で述べているのも、武帝の仏典講義に参加し、仏牙を献上した波斯国使の行為が影響していたのであろう。また、大同五年(539)に仏髪を譲渡した扶南(カンボジア)の遣使を取り上げた。扶南が使者を派遣する2年前、梁では阿育王建造との伝承がある長干寺の舍利塔が再荘厳されることとなり、地中から仏舍利とともに一丈二尺の仏髪が発見されていた。南海貿易を主導する立場にあった扶南は、梁における仏髪の「再発見」とその特徴について情報を入手し、同じく一丈二尺の仏髪を譲渡したと考えてよい。扶南が贈渡した一丈二尺の仏髪は、梁到着後、梁で「再発見」された仏髪と比較されたであろう。恐らくはその結果、梁で「再発見」された仏髪の

真偽が確認されたはずである。扶南は、武帝の「再発見」した仏髪の正当性を証明「真」の仏髪を得た武帝の崇仏もまたその正当性を証明される。することで武帝の意に沿い、梁との交渉・交易で得られる利益を確保・増大させようとしたのであろう。

「職貢図」についてより詳細な検討を加えたのが論文である。

第一章第一節では、南京博物院旧蔵の写本の題記と、『愛日吟廬書画続録』から発見された佚文に残る使者の人名から、西アジア・中央アジア諸国から梁に至った使者にはソグド人が含まれていたことを明らかにした。第二節では、台湾故宮博物院所蔵の二写本で于闐国使者図が壺状の物を抱えており、これが天監一八年(519)における同国の献上品(瑠璃罍)を表現することに着目、周古柯国や胡蜜丹国の使者図もまた普通元年(520)における両国の献上品を捧げ持つことを明らかにした。

第二章では、使者図には、リアリティを追究した痕跡が認められる事例と共に、作成者・見る者にとってのあるべき姿が描かれたと思われる事例が存在することを指摘した。また、リアリティを重視したと推定される使者図を含め、武帝の治世を回想しながらその徳を強調・称賛するための部分的なイメージ化は、使者図の随所に存在すると述べた。

(2) 経録を勅命によって編纂するということは、皇帝主導で經典を収集し、その真偽を決定していくことに他ならない。ならば皇帝は、経録の編纂を通じて、少なくとも漢訳仏典圏内における仏教信仰の主導者たる地位を創出したはずである。そこで、学会発表では中国の勅撰目録史を概観してみた。すると、勅撰目録は南朝梁で誕生し、北朝・隋・唐に継承されたことが知られた。目録編纂と連動して、皇帝主導で一切経(目録に記された經典全て)を書写することも始まった。

他方、日本古代の一切経書写について、先行研究では、新羅への優越、唐との平等を主張にするため、朝廷は一切経の書写・完備を急いだと評価することがある。しかし日本は、中国で漢訳された經典を、唐代の勅撰目録に則って書写したに過ぎない。唐との対等を志向した吐番が、仏典をチベット語訳し、勅撰經典目録を作成して、しかも入蔵には、政治的な判断に基づく判別が加えられた、チベット語一切経の整備に努めたこととは大きく異なる。

中国における勅撰目録と勅命による一切経書写、及び吐番における一切経整備の在り方を考慮するに、日本の一切経書写に唐との対等や新羅への優越といった意義を求めることは不適当といえよう。

皇帝の求心力を高めるための仏教政策が、対外交渉の窓口である辺境地域に与えた影

響も、舍利塔建立事業と関連して取り上げた。論文では、2004年にベトナムのバクニン省で発見され、2012年にその存在が確認された交州禅衆寺の舍利塔銘・舍利石函・石板についてその特徴を簡単に紹介した。仁寿舍利塔建立に際して作成された石函は、これまでは宜州神徳寺の石函しか知られていなかった。仁寿舍利塔が朝廷から配布された画一的な「造様」によって建立されたと考えられてきたことから、先行研究では、舍利石函も同じく画一的に作成されたのであり、その詳細は宜州神徳寺石函を基準として推定すべきことが提言されてきた。

しかし、交州禅衆寺舍利石函は、大小・図様の有無・形体において宜州神徳寺の舍利石函と異なっている。そこで、仁寿舍利石函に関連する史料を仏教史書から収集したところ、仁寿舍利石函の大きさや図様の有無、石函の形状は、画一的であるよう求められていたとは必ずしもいい切れないという結論に達した。つまり、仁寿舍利石函の場合、文帝の感得した舍利を埋納するという同一の目的の下、ほぼ同時期に作成されたにもかかわらず、大きさ・図様の有無・形状には各地で差異が生じていた可能性が大きいのである。これは、各地の仏教信仰における差異や、寺院を取り巻く政治状況から説明されるべきであらう。

また、都城と寺院の関係についても取り上げた(図書)。平城京の寺院が長岡京・平安京へ移転されなかったことについては、平城京仏教勢力の介入を阻止するためと説明されることがあった。しかし、日本古代の遷都において、大寺が移転されたのは藤原京から平城京への遷都の時に限られる。移転の対象となった大寺は、天武の父母が建立した大安寺(百濟大寺)と天武が持統のために建立した薬師寺に加え、興福寺・元興寺といった氏寺である。前者は平城京が天武系皇統の都であることを示すものであり、後者は両寺院の移転に伴って、氏寺もまた移転すべきであるとの王権の意向を示すものであった。

一方で、桓武天皇は天智系皇統に属する。しかも桓武は、生母を介して天武系皇統に連なる、異母弟の他戸親王(父は光仁天皇・母は井上内親王)を退けて立太子・即位した。つまり桓武が、天武系の天皇たちが寺院移転に見出した意義を共有したはずはない。そのため、平城京の大寺は長岡京・平安京に移転されることはなかったのであろう。

(3) 天皇の受菩薩戒は、8世紀、孝謙天皇の時代に導入され、その後長く途絶する。ところが9世紀には、即位直後の清和天皇が円仁から菩薩戒を受けた。当時、災害が頻発したことなどにより、幼帝清和の身体を佛法によって護持することが強く求められた結果、受戒が実施されたものと推測される。ところで、清和も含めて、平城天皇以来、密

教僧から灌頂を受けた天皇は多い。その灌頂師が、円仁も含めて入唐僧に限られたことから、天皇の受灌頂が唐皇帝の受灌頂（輪王七宝灌頂など）を念頭に置いていたことはまず間違いない。

中国における崇仏のあり方に倣い、菩薩・転輪聖王としての権威獲得を志向した国王はアジアに散見される（論文）。それら仏教的に荘厳された国王たちの中には、国内のみならず、対外的にもその権威を喧伝するものがいた。そうであるからこそ、仏教的に荘厳された国王は、近接した地域間で連動して登場すると推定される。

南北朝～隋唐代には、国境を越えて活動した僧侶が多く見出せる。彼らは、移動先の僧侶と師弟・同学関係を構築し、帰国後もその関係を維持した。先行研究では、特に東アジアにおいて、そのような師弟・同学関係が、時として私的な交友の域を超え、国家間交渉を補完する役割を果たしていたことが指摘されている。そこで論文では、国境を越えた師弟・同学関係をパイプとして諸国間交渉が展開した事例 例えば、中天竺と唐の関係が悪化、交戦の後に両者の交渉が途絶した時期には、玄奘と同学関係にある中天竺菩提寺の僧侶が唐へ經典を送付した。唐はその返礼として使者を菩提寺に派遣、袈裟を奉納するなど、中天竺側が示した関係回復の意向を受け入れていた を収集した。その結果、師弟・同学関係が国家間交渉を補完したように見える事例は、アジア全域で認められることを明らかにした。

(4) 東アジア諸国が、朝貢という正式な外交ルートを通じて中国に留学僧を派遣したのは、現存する史料からいえば、新羅真平王18年(596)に隋へ派遣された曇育が最初である。曇育入隋の同月に朝貢使が派遣されているから、曇育は朝貢使に同道されて新羅を出発したのであろう。

開皇14年(594)、新羅は遣隋使を派遣して隋の冊封を受けた。それまで留学僧を南朝陳に派遣していた新羅は、冊封を受けた2年後、朝貢使に僧侶を同行させることで、隋代仏教を正統としてその公的な導入を開始したのである。このことは留学僧派遣には、当初から政治的色彩が濃厚であったことを示す。隋代以来、南北朝分裂期に低下した権威の向上は急務であった。そして、権威を確固たるものにするため、文帝と煬帝が仏教の持つ影響力に注目したことはこれまでも指摘されてきた。高僧にそれら留学僧を教授させたのも、そのような政策の一環と位置付けられる。学会発表 では、留学僧の受け入れを歓迎する中国側の政策に留意した上で、遣隋使以来、日本が多数の留学僧を隋唐に派遣したことを再評価すべきであると指摘した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

河上麻由子「職貢図とその世界観」  
(東洋史研究会、『東洋史研究』74 1、2015年6月、1 38頁)

河上麻由子「ベトナムバクニン省出土仁寿舍利塔銘、及びその石函について」(査読あり)

<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/180560>

(京都大学人文科学研究所、『東方学報』88、2013年12月、73 93頁(逆頁))

河上麻由子「唐代における僧侶と対外交渉」(査読あり)

(日本史研究会、『日本史研究』615、2013年11月、27 52頁)

河上麻由子「清和天皇の受菩薩戒について」(査読あり)

(日本仏教総合研究学会、『日本仏教総合研究』11、2013年5月、21 41頁)

[学会発表](計 3 件)

河上麻由子「東アジアの勅撰經典目録について」

(シンポジウム「日本古代の地域と交流」国際日本文化研究所、2015年2月9日)

河上麻由子「《職貢図》的研究情况」(中国語)

(“历史与展望：中西交通与华夏文明”国际学术研讨会、2014年8月19日、於甘肃省兰州市甘肃省委党校)

河上麻由子「從遣隋使到遣唐使」(中国語)

(“古代中国与東亜世界”国際學術研討会、2013年7月10日、於上海貝爾特酒店)

[図書](計 2 件)

河上麻由子「遷都と寺院」

(館野和己編『日本古代の都城・都市』、勉誠出版、2015年6月出版予定、頁数未定)

河上麻由子「『梁職貢図』と東南アジア国書」(査読無し)

(金子修一・鈴木靖民編『梁職貢図と東部ユーラシア世界』、勉誠出版、2014年5月、405 426頁)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等(計 7 件)

河上麻由子「書評 河内春人著『東アジア  
交流しの中の遣唐使』」

(歴史学研究会、『歴史学研究』掲載号未定、  
2015年中刊行予定)

河上麻由子「読書案内 東アジアの仏教交  
流」(山川出版社、『歴史と地理 世界史の研  
究』242、2015年2月、173-176頁)

河上麻由子「書評と紹介 新川登亀男編  
『『仏教』文明の東方移動 百済弥勒寺の西  
塔舍利荘嚴』」

(吉川弘文館、『日本歴史』801、2015年2月、  
100-102頁)

河上麻由子「コラム 古代東アジアの対外  
交渉と僧侶」

(水口幹記編『古代アジア世界の祈り』所収、  
2014年9月、173-176頁)

河上麻由子「東アジアにおける仏教の伝播  
対外交渉史の視点から」

(帝塚山大学公開講座、2014年7月12日、  
於帝塚山大学)

河上麻由子「書評 藤野月子著『王昭君か  
ら文成公主へ 中国古代の国際結婚』」

(唐代史研究会、『唐代史研究』16号、2013  
年8月、91-98頁)

河上麻由子「遣隋使」

(朝日新聞出版、『週刊 日本の歴史』3号、  
2013年7月、18-20頁)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

河上 麻由子 (KAWAKAMI, Mayuko)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：50647873